

平成27年度第4回岡山市総合教育会議

日時：平成27年9月3日（木）

場所：岡山市役所本庁舎第3会議室

○司会 ただいまから平成27年度第4回岡山市総合教育会議を開催いたします。

本日は、全員の御出席をいただいておりますので、会議は成立しております。

傍聴の希望がありますが入室を許可してよろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

○司会 傍聴者の入室を許可します。

＜傍聴者入室＞

○司会 続きまして、協議事項に移らせていただきます。

議事の進行は招集権者である市長にお願いしたいと存じます。市長、よろしくお願ひいたします。

○大森市長 それでは議事を進めたいと思いますが、その前に教育委員長の交代がございましたので、委員長から一言お願いいたします。

○東條教育委員会委員長 一昨日、9月1日付をもちまして、教育委員長となりました東條でございます。引き続き岡山市の教育のために頑張ってまいりたいと思いますので、活発な意見交換をどうぞよろしくお願いいたします。

○大森市長 それでは、次第に沿って議事を進めます。

関係者からの意見聴取でございますが、まず、岡山市中学校長会の小野会長から御意見をお聞きしたいと思います。小野さん、よろしくお願いいたします。

○小野 よろしくお願ひします。御南中学校の校長の小野でございます。

まずもって、こういう会議に自分も呼んでいただきまして、非常に感謝申し上げます。

私、教職生活37年目で、ことし最後ですが、途中9年間ほど事務局にお世話になりました。37年間で体感しましたことや、考えたことを中心に、この会に当たりまして、他の中学校長の意見も多少募集して聴取しておりますので、そういうもの。平素から我々の学校運営や子どもの教育に関して参考にさせていただいております研究者の方の見解等も交えて、お話をさせていただきたいと思っております。

冒頭に、いじめや不登校、学力の低迷、さまざまな問題が取り沙汰されていますが、元大阪樟蔭大学の学長さんで、いじめ不登校の世界的な権威、森田洋司先生をお招きして、その先生のお話で、私、目からうろこが落ちたようなことがあります。その先生いわく、子どもたちが起こしますさまざまな問題行動については、川の中の流れにできる渦のようなもので、どうしてその渦ができるのか、渦を見ているでも要因はわからない。その川の流れの底の様子、底流の流れの様子がどうかを見なければならぬ。この先生、社会学の先生ですので、社会的な変化とか状況、そういうものが子どもに非常に大きな影響を及ぼしておるといふ持論を持たれております。

これは30年以上前になりますか、岸本裕史先生、神戸の小学校の先生です。この方が出された「見える学力、見えない学力」という有名な本がありまして、非常におもしろい分析をされています。この方が実際に児童たちに調査した結果、小学校へ入る段階で、日本語を知ってる語彙、語彙数に着目されまして、成績上位の児童で7,000語、成績振るわない児童が2,000語ぐらい、日本語を知っておる数に差があると。それが6年生になると、3万7,000語と9,000語ぐらいに差が広がってくると。分布をとってみると、日本語の語彙数と成績がほぼ比率。そのような本を出されて。

これは実際に調査されたそうですが、どのような会話が家庭内でなされているか。家庭内では方言で会話をしておるわけで、場合によっては標準語を余り聞いたことがないと。そういう子どもたちもたくさんいる。教科書はもちろん標準語で書かれていますし、中学校になると難しい漢字が出てまいります。テストの問題、これももちろん文章題は標準語ですので、しっかり教科書を読もう、あるいは問題を解こうと思っても、その意味がわからないような子どもまでおると。そんなことを書かれています。

すごい話なんです、ALT、中学校に毎年来るんですが、日本人の子どもと会話して、ALTのほうが日本語をたくさん知っておる。日本語を知らないので、びっくりすると。そういうことを漏らす者もいました。

先般、小・中の校長研修会で、現在、子どもの貧困について研究をされておられる中教審の委員で、安倍総理大臣にもレクチャーに行ったと言われておりましたが、大阪府立大学の山野則子先生といわれる方の御講演を聞かせていただいたんですが、非常にショッキングなデータが示されまして、貧困家庭の生徒が1日3時間家庭学習をした結果と、経済的に豊かな家庭の生徒が全く家庭学習しなかった数値が同じだったと。

そういうこともお話の中にありました。そういうことを総合しますと、見えない学力の部分、非常に大きな問題かなとも思っております。

さらに、子どもの学力や学校の指導のあり方について研究されております大阪大学の志水宏吉先生。先般、県教委が高校の校長の研修をされたそうですが、この方もはつきり、日本の中にも階層化が進んでおると。そういうことも指摘をされております。

今のは学力面からですが、もちろん問題行動、不登校、その要因も学力との相関が見られまして、要するに子どもにかかわるいろんな問題行動の背景には、やはり家庭のあり方、親の考え方、もっと具体的に言いますと、離婚をしたりする夫婦関係とか、今の経済力、虐待、こういう要因が非常にちらつきます。

私ども現場におります教員は、ほとんどの者が、子どもは大人の犠牲者的な立場であって、いろいろな問題行動を起こす子ども、決して起こしたくて起こしたものではないという認識を持っております。そういう面では、もちろん教育の問題ですが、見方を変えると福祉の問題なのかなと最近痛感をしております。

さらに、通常学級に今在籍する発達障害の生徒が非常にふえていまして、この教育についてどういうふうにしていくのかも大きな課題にもなっております。

先ほど御紹介した大阪大学の志水先生がおもしろいことを言われまして、現場でどういうふうにするのか。お好み焼きの高さを気にするな、数値ですね。志水先生言われるように、本来、教育はたこ焼きを焼くように、一人一人の子どもの実態に合わせてしっかり手を引いて、それを積み上げていく行為じゃないかと。そういうことも直接にお話の中で聞かせていただきました。

ということで、実際に現場では何をしておるのかですが、中学校の現場では支援の必要な生徒の個別指導、これをできる限り厚くするようにしております。具体的には放課後に学習会を持ったり、これも人数の限界がありますので、中には学校支援ボランティアに、そのシステムに入っていていただいて、取り組みを手伝っていただいたりという学校もふえております。

また、授業改善とか家庭学習の立て方の工夫、これはもちろん努力を続けてますが、全校で朝読書、朝、全員が時間を決めて読書しましたり、あるいは英語とか漢字のコンテストをしたり、中には百ます計算を少しして、それから授業に取りかかる。そういう具体的な手だてをしておるところもあります。あと、地域協働学校も進みまして、小・中連携して取り組みをするところもふえておるやに聞いております。

こういうことを地道に行いながら、地域協働学校の組織をうまく教育計画の中にかかり取り込むか、これも学校長の学校経営の大きな課題に今なっているのかなと思っておりますし、地域の教育力を活用していけば、あるいはしなければ、こういう問題行動、個々の問題の改善はしないし、逆にうまく活用できれば、救われていく子どもたちも多いのかなと思っております。

別の観点で中学校長の今の課題を少し述べさせていただきますと、どこの地域も全てそうかということじゃないですが、急激な都市化、公立の中学校、最近私立に附属の中学校ふえまして、中学進学に向いていく生徒がかなりおります。本校でも非常にたくさんいますが、大体本校の場合は国公立で27名ぐらい、私立で32名ぐらい。そういう中で、ともするとリーダー的な生徒たちですので、中学校の学習活動の柱に期待されるものが少なくなると、なかなか学習効果が進まないという悩みも聞きます。

さらに、このことが市内の中学校間の格差意識も呼んでおると。それが地域の差別化につながらなければいいがなと危惧しておる校長もかなりおります。

また、数値の論理でいきますと、通常学級に発達障害の子がかなり在籍してますので、問題行動を起こす子や、その生徒たちへの排除意識、こういうものが高まらなければいいがなと懸念もしております。

時間もありませんので、別の観点でお題を、現場の負担とか勤務状況についてもいただいておりますので、それについて簡単に御説明をさせていただきたいと思います。

率直に申しまして、中学校の現場で、勤務時間や勤務内容に非常に強く影響及ぼしておるのは部活動の指導だと思います。日常的に、教材研究ですとか成績処理、あるいは諸活動の準備等が大体6時半ぐらいですか、夕刻の。部活動が終わってから取りかかりますので、深夜に及ぶものが非常に多いと思います。土日は大会ですとか対外試合、こういうものが開かれます。そういうことで、長時間の拘束での肉体的な疲労の蓄積も見られます。さらに、中体連の各競技種目とか各競技団体の事務局的な仕事を任せられる教員もおりまして、それについては非常に負担が増加もしております。

ただし、部活動につきましては、割合、部活動を通じた生徒との一体感を味わえるということで、逆に部活動をやることがストレス緩和につながっておる面もありまして、そのあたりの調整、あるいは保護者、地域、もちろん生徒も、熱心に部活動を指導する教員への期待感も非常にありますので、そのあたりの調整が非常に難しいなと考えております。

あと部活以前に、今、全県的に取り組んでおります、中学生はスマホ、通塾。塾にもかなり時間を割いております。これも塾へ通って効果があればいいんですが、必ずしもそうではありません。家庭学習が岡山の子は少ないと言われるんですが、物理的に時間が生み出せないのも状況かなと。

ですから、まずはスマホの規制。部活、通塾の適正な見直し。例えば朝の練習については整理していくとか、そういうこと。生活の改善をしていくことが非常に不可欠かなと。それなくして、今、いろんな取り組みをしますと、ブラックユーモアみたいな話ですが、塾の宿題を家庭でして、疲れるので授業中に寝る生徒とか、休息の時間がなくなって、体力、気力を逆に損なうことになるのかなと思います。

そういう中で、今年度から部活動の外部指導者の導入を大幅に拡大していただきまして、これは非常にありがたいと思っております。将来的には生涯体育とか生涯学習へ、部活動も一環になるようなシステムができればありがたいかなとも思っております。

時間になりましたので、雑駁なことで抽象的なことも多かったんですが、お話をさせていただきました。

○大森市長 小野先生に対しての御意見、また御質問ございましたらお願いいたします。

○曾田教育委員 先ほど、教育の問題と福祉の問題との融合、お互い支え合わないといけなことがあるのがよくわかったんですが、それを支える意味で、支援の必要な子たちの放課後学習とかをしてる中で、学校支援ボランティアという言葉が出たんですが、岡山市域とても広いんですが、学校支援ボランティアに行く人の立場と、受け入れてくださる学校現場の事情と、何かミスマッチとかギャップとかがあることありますか。

○小野 学校支援ボランティアにつきましては、よく聞く校長の悩みとしたら、やはりこれも地域性ございまして、学生ボランティアは、中心部は非常に足場が通いやすいのでたくさん得られるんだけど、郊外の中学校へ、なかなか学生ボランティアが得にくいと、そういうことは聞いております。

あと、地元の方たちのボランティアについては、地元の組織、例えば本校で言いましたら警察協働委員会ですとか、主任児童委員さんの会とか、既成の組織が活発なところは、そことの連携でかなり人が組織的に得られるんですが、そうでないところは、なかなか支援していただく機関の確保が課題かなとも聞いております。

○山脇教育長 最後に言われた部活動ですが、一方では、将来的には生涯学習、生涯スポ

ーツとしての位置づけではいけないだろうかということと同時に、やはり子どもとのつながり。その場で見せる、学習面では見せないけどスポーツの場面では見せるような子どもの姿であるとか、そういう意味では、教師と子どもとつながる面では、部活動は大切な役割も果たしている。最終的にそういう形になっていくというのは、例えば生涯スポーツという領域の中で指導していくことが考えられるのかどうなのかが1点。

もう1点は、先生方の負担と同時に、子どもがすごく疲労してきている。例えばスポーツ、朝練習があつて、1週間やって、土日もし仮にあつたとすれば、休みなしでずっと子どもたちも動いていかないといけない。どこかがきちっと、以前、土曜日、1週間に一遍は休みましょうと。土曜日か日曜日どちらかを休みましょうという方針の中で動いていったんですが、それがまた崩れてるんじゃないかなということもお聞きするんですが、そのあたりの実態と、そちらの方向へいっていいのかどうなのかということ。

○小野 今も、実は中体連を中心に、適正な部活動の運用の指針が出ております。申し合わせもするんですが、やはり個人的な教員の思いとか、あるいは資質にもなるのかもしれないんですが、なかなかそれをきちっと守れているかというのと、そうでもない実態なんです。

私、思いますのが、若手の教員も非常にふえておりますので、部活動の指導についても、研修をきちっと行って、あるべき姿、あるいは適正な部活動の運営の仕方等についても、ある程度教えるじゃないですが、みんなで守る。あるいは過度に違反する者については、遠慮をさせるぐらいの見直しというか、これも必要かなとは思っております。

生涯体育への移行ですが、やはり人材だと思います。地域の中に、若手の教員に、部活の運営のあり方まで指導していただくような見識のある指導者の方がおられれば、それと教員がマッチして、うまいぐあいに行くのかなと。逆に外部の方で見識のない方が入られたら、教員以上に暴走する可能性もありますので、そのあたりは学校だけ、地域だけじゃなく、全体でどういうシステムでいくかが必要なのかなと考えます。

○塩田教育委員 スマホの時間の規制の話が出てきました。岡山市では生徒たちの自主的な機運を重視する形だったのですが、盛り上がってきた中、夏休みに入って、これからまた仕切り直しだと思います。そういった対策を何かお考えでしょうか。

○小野 スマホについても、中学校長会でどういう進捗状況かなと調査もいたしました。

今、1学期間、中学校は、校内は生徒会が中心として、できれば学区の小学校と連携をどういうふうにしていくかという相談を、かなりの中学校区で行っておるようです。本校もそうです。秋口、2学期にそういう取り組みを具体化させて、中学校の生徒会が小学校の児童会と一緒に考えていく。そして、中学校区のいろんな取り決めを出していく。そして、それをPTA等々協力して具体化していく。そういうスケジュールで、ほとんどのところが動いておるように思います。

○大森市長 最初に渦と川の流れを例えにされて、川の流れを全体見ないといかんというお話をされておりました。岡山の渦は他県、他の市に比べて大きいんですね。そういう面では川の流れ全体にいろいろと問題があるとも思います。

学力のも、この前少し出てました。中学校相当悪くなっている。これも1つの渦の問題なんだろうと思います。

総体的にこういうことになっている原因が、一体何だとお考えになられますかね。

○小野 非常に難しい質問で、校長でもいろいろ論議の対象になることですが、岡山というところは、ある意味、非常に恵まれておるように、個人的には思います。岡山の子どもたちの1つの特性、悪いほうの特性としたら、豊かな育ちのために我慢するとか、耐えるとか、辛抱する、そういうものがやや欠けておるのかなと。それに、今の世の中に魅力的なものがふえている。スマホが代表ですが、ふえている。あるいは、駅前の状況を見ても魅力的な状況にもなっております。

そういうところで、ひところは会津の教育のことがテレビで、私も参考になったんです。やはり規範意識ですか、ならぬことはならぬということをおさいときからある程度積み重ねていくような風土づくりですか、子育ての見直しですか、そういうものが、遠いようなことですが、近いことかなとも考えます。

それから進学状況。中学で言いましたら、進学状況についても同じようなことが言えるのかなと。結局、昔に比べまして、かなり多岐にわたって進路が選べる。それはいいんですが、安易に選べてしまう。ですから、学習を真剣に重ねなくても、中学卒業して何とかなるだろうという意識、そういうものも手伝っているのかなと。少し抽象的にしかお答えできないですが、今感じておるところです。

○東條教育委員会委員長 ちょっと違う視点の質問をしたいと思います。発達障害のお子さんのことに関して触れておられました。今、確かに発達障害を持っておられる方

は、数年前の調査で、大体一学級で6%という実感があるという調査がありました。

ですから、普通のクラスで先生方がその子たちの指導をされてることがあって、中学校は難しさがあると思うんです。今、発達障害に関して注目されているのは、どういうふうに自立していただくかということだと思います。ですから、どういうふうに学校に来てもらうかというよりも、その方たちがどんなふうに生活の力をつけていってもらえるかが大きな課題になっていて、高等学校に進学してる方も多いですが、途中でやめる方が多いです、高等学校の不登校率、これは中学校と同じぐらいですので、なかなか適応できないことも多いと思います。

将来の就労とか社会的な自立に向けて、中学校で授業に出て勉強させることだけではなくて、生活する力を、どんなふうにつけるという手だてをとられているのかということをご伺いたいなと思っています。

○小野 これも非常に大きな課題になっております。このことに関しては、教育委員会ともいろいろ話をしながら、まずは早目の指導にかかる。特に小学校から中学校へ子どもは来るわけですが、その段階で、やや不確実というか不透明というか、発達障害的な生徒がおります。そういうものに関しては、まずきちんと医療にかかって見立てをしていただいて、ドクター等との話の中で、どういうふうな特性があり、どういう進路が選べるか、まず確実につかんでいこうと言うております。

これは親御さんの思いとか願いとか、そういうものが非常に大きく左右しますので、親御さんとはそういうことについて、話しにくい話題ではあるんですが、将来の子どものためだということで、早目に親御さんとの話を開始する。そういう手だてもしております。

中学校長会としては、逆に高等学校等に、かなり理解は進んできたんですが、中学卒業した後の受け入れについてはいろいろ配慮していただきたいし、もっと言うたら、高校の現場でも、個別の指導も含めて、していただけんかという要望も毎年しておるところです。

○大森市長 では、平坂会長、お話をお願いいたします。

○平坂 小学校長会の平坂でございます。

私もまずお礼を申し上げます。この会議にて、このような場を設けていただきまして本当にありがとうございます。

では、早速ですが、いただいたテーマに沿って、小学校現場の様子や校長会として取

り組んでいることを中心にお話をさせていただきます。

まず、学力の問題でございます。8月の終わりに今年度の全国学力・学習状況調査の結果が示されました。岡山県の小学校では、新聞報道等でも触れられておりますように、昨年度と比較して、全ての科目において全国平均との差が縮小したということでございます。これまでも小学校各校における取り組みの積み重ねで改善が見られたことは大変喜ばしいことですが、ことし1年だけの成果に終わらないように、今後も一層の努力を重ねていくつもりです。

かねてより、毎年、調査結果が示されますと、全ての学校は自分の学校のデータを分析するとともに、今後の取り組みの方向を明らかにして、いわゆる学習や生活における改善プランを作成し、実践を重ねてきております。

一例として御紹介いたしますけど、私の勤務する陵南小学校では、まず基礎基本の定着を図るために、月曜日の6校時を希望者が居残りで個別の学習に取り組める時間として教育課程にはっきりと位置づけております。また、自分の考えをまとめて説明する、そういう力を伸ばせるように、1単位時間の授業の中に、児童同士の話し合い活動を必ず位置づける工夫を加えた取り組みを継続しております。

各校が自校の実態に合わせて独自の取り組みを展開するのは当然ですが、岡山市の小学校は足並みをそろえて取り組むことも重要だと思います。このような観点から考えると、岡山市教育委員会が推進している学力向上プロジェクトの「授業これだけは！！」、これもその典型的な取り組みだと考え、賛同するとともに、各校、各学級での徹底を図っているところです。

その一方で、岡山市の小学校長会としても、独自に学力の向上を目指して、足並みをそろえて具体的に取り組んでいることを2つ御紹介いたします。

まず1つ目は、小学校長会における校長先生自身の研修活動として、学力の向上に向けての岡山型一貫教育のあり方について継続的に探っているところです。取りかかりの平成24年度は、市内中学校区での取り組みの調査をいたしました。25年度には、保育授業の充実、学習を支える生活の基盤づくり、家庭との連携という3つの面に焦点を当てて、指導すべき内容や方法についてのスタンダードモデルを作成いたしました。26年度には、そのスタンダードモデルを手がかりとして実践した事例集の作成をしています。

そして、岡山型一貫教育の具体化に取り組んで数年経過した本年度は、現状を改め

て見直すために、市内小学校の取り組みの実態と効果的な取り組みについて再調査をして、情報を共有することで、今後、さらに岡山型一貫教育の充実を図る一助にしたいと考えております。

この取り組みを通して得られた成果として、まず幼稚園、小学校、中学校の12年間で一貫して取り組むべき内容がだんだん明らかになり、多くの中学校区では、目指す子ども像の設定をすることができています。また、保育・授業の充実、学習を支える生活の基盤づくり、家庭との連携を柱として、12年間で育てたい能力や態度を系統化した基本モデル、先ほど申しましたスタンダードモデルをつくることができました。

特に、幼・小・中で連携して学習指導の充実を目指す取り組みをした中学校区の成果としては、中学校区の幼・小・中合同研修会がありますけれども、この研修会をそれぞれの学校の教育課程に位置づけて、全職員参加で公開授業や研究協議を行うことができるようになりました。

家庭との連携の充実を目指す取り組みをした中学校区の成果としては、例えばメディアコントロールの取り組みを、中学校区で実施期間をそろえることで、家族ぐるみの取り組みが進めやすくなりました。さらに、一貫した取り組みを進めるために、地域協働学校の組織やPTA、学区の育成協議会との連携、各校園の校務分掌ごとの連絡会議を作成して、それを核にすることで取り組みを継続できるようになりました。

もう一つ、校長会として取り組んでいることを御紹介します。岡山市教育委員会に予算づけをしていただいで実施をしているハイパーQUやアセスといった質問紙調査を学級集団づくりに有効活用し、落ちついた学級集団をつくることができれば、子どもたちの学力向上にも反映されるのではないかとという仮説を立てて、その検証に向けて2年計画での取り組みを続けております。

質問紙調査が始まった昨年度は、全ての学級担任が、質問紙調査を活用した学級集団づくりの取り組みを年間の計画に沿って確実に実施することを重視しました。2年目の本年度は、あわせて若手の育成にも焦点を当てて、新採用、2年目の担任の先生を対象に、質問紙調査を活用した学級集団づくりと授業づくりの取り組みを行っております。この取り組みの成果と課題については、今後少しずつ明らかになるものと考えております。

次に、2つ目のテーマである児童の問題行動についてです。この問題については、それぞれの学校で実態が随分違うと思います。校長会として、全市的な問題行動の実態

は、データとしては把握できておりませんが、全体的な傾向、各校の取り組みの成果と課題については、この後、発言される服部先生が詳しく述べていただければと思いますので、詳しいお話はお譲りいたしますけれども、先ほど中学校長の会長さんもおっしゃられました、学校現場の大きな課題としては、やはり発達障害を持っている児童が、特別支援学級だけでなく通常学級にも多く在籍していることが挙げられると思います。

特徴的な例を申しますと、ちょっとしたきっかけで情緒が不安定になってパニックを起こした児童が、友達に暴力を振るったり、教室を急に飛び出したりするといった行動が目立つ傾向があると思います。したがって、学校の先生には、発達障害に関する研修をきちんと位置づけて、専門的な知識、あるいは児童への対応の仕方について、技術を身につけてもらうことも急務となっております。

また、近年、特別支援教育を学校の重点項目に掲げて、いわゆるユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業実践、あるいは職員研修を取り入れる学校もふえてきていると聞いております。

3つ目のテーマで、教職員の勤務実態について触れさせていただきます。

現在、学校では、教職員の勤務実態を把握し、適切な勤務管理をするために、県費の先生方には毎月、業務時間記録を提出してもらうことになっております。全市的なデータは持ち合わせておりませんが、市内の小学校の多くの先生方が、勤務時間を過ぎても遅くまで頑張っていらっしゃることは間違いのないところだと思います。

私が勤務する陵南小学校の実態で申し上げますと、過去4年間の記録をもとに単純計算してみますと、年間を通じて職員1人当たり、毎日2.5時間の残業をしていることがわかります。別の見方で言いますと、勤務時間が終わって、6時半ぐらいまでに学校を出る職員は全職員の大体6分の1です。8時ぐらいまでに学校を出る職員が全体の半分です。そして8時以降も学校に残って仕事をしている職員が全体の3分の1という実態です。意味もなく遅くまで残っている職員はおりませんが、遅くまで残って仕事することになってしまっている教職員はいるような気がいたします。

特に小学校の担任をしておりますと、日常的に多くの業務に携わっています。主なものは授業の準備や教材研究、校務分掌にかかわる業務、それから学校行事の準備、宿題やノートの点検、成績の処理、生徒指導やそれに伴う保護者の対応などがございます。これらに校内の諸会議や学年会などが加わってまいります。

先ほど校長会の取り組みとして、新採用、2年目の先生を対象に行っている学級集団づくりと授業づくりについて紹介をいたしました。ことしの7月に行ったアンケートの結果から、2年目の先生と3年目以上の先生に分けて、日ごろの悩みや課題について調査したところ、わかりやすい結果が出ました。2年目の先生方の悩みや課題の上位3項目は、1番が十分な準備をして授業に臨めないということ。2番目が授業で発表する児童がいつも決まっている。3番目が教材研究の仕方がわからない教科があるというものでした。このことから、若い先生方が十分授業の準備や教材研究ができていないまま授業に向かっている実態が見てとれ、他の業務に追われている状況がうかがわれると思います。学年団の先生や先輩教師から、教材や授業について話題にできるような時間の確保などの取り組みの必要性を感じます。

また、子ども同士のトラブルの解決、あるいは楽しい授業の仕方といった報告も含めて、2年目の先生方は、ある程度経験を必要とする項目での悩みが多いのに対して、3年目以上の先生では、子どもの内面の理解といった経験の積み重ねだけではなかなか思うようにいかない項目について課題と感じていることがわかりました。ただし、担任としてやっている仕事は、全て児童のためと思ってやっており、やっていることが児童のプラスになって返ってきたときには、担任として大きな達成感を感じています。そうであれば先生の忙しさは、負担やストレスにはならないと思います。

反対に、子どもの成長にはね返らない業務や、例えば、いわれのない保護者からの苦情への対応等には大きな負担を感じて、精神的に追い詰められているように感じる教員もおります。各学校では、少しでも教職員の多忙感を解消すべく、校内の会議を精選したり、職員会議において議題を協議事項と連絡確認事項にきちんと分けて、時間がかからないような工夫をしたりするための取り組みもしています。中には、多くの学校で行う職員会議の準備として実施する企画会議という会議を省いている学校もあります。さらに岡山市を見習って、すいすい水曜日の取り組みに学校を挙げて取り組んでいるところもあります。

岡山市教育委員会が導入してくださったC4thというシステムによって、校内や学校間の連絡が迅速に確実にできるようになったこと。また、新規の学校業務アシスト事業により、教職員の負担軽減が図られていることについては感謝をしている教職員が大変多いのも事実です。教職員に、早く帰ろうやと声をかけても、なかなか状況が変わらないという苦しさがありますが、少なくとも頑張っている教職員がやりがいを感じなが

ら仕事に携わることができるように、我々管理職としては、せめて職員に対する意欲づけやねぎらいの言葉を怠らないように心がけたいと思っているところです。

以上でございます。

○大森市長 このまま服部さんにお話をさせていただいて、そして意見交換という形にさせていただきたいと思います。

○服部 まず、自己紹介をさせてください。私が教育委員会にお世話になったのが平成13年4月からです。それまでは中学校で教員をしていました。教育委員会では、主に生徒指導や危機管理を担当しまして、平成21年度からは3年間、こども総合相談所に行かせていただきました。現在は教育委員会に戻って、指導課の中にある教育支援室で、生徒指導や危機管理、特別支援教育を担当する教育支援室の室長をしております。

本日はこのような機会を与えていただきまして大変ありがとうございました。子どもたちを取り巻く状況について、今日、私からは具体的なお話、少し生々しい話をさせていただこうと思っています。よろしくをお願いします。

さて、夏休みが終わりましたが、皆様方にとって夏休みというのはどんなイメージでしょうか。以前の夏休みと現在の夏休みはイメージが変わってきているようです。以前は、例えば両親の実家に行って、田舎に親族が集まって、お墓参りをしたり、みんなで御飯を食べたり、あるいは家族で海水浴や夏祭りに出かけたり、ラジオ体操、虫取り、絵日記、自由研究、そういう夏休みが定番だったと思います。

現在の夏休みは、皆さん、どういうイメージでしょうか。海外旅行やホームステイ、部活動を含むスポーツ大会への参加、これは海外も含むスポーツ大会への参加。そして塾の合宿なんていうのもあります。とても忙しい夏休みを過ごしている子どもたちの像があります。

一方で、どこにも連れていってもらえず、家でずっとゲーム三昧、ショッピングセンター内で一日過ごしている、友達の家に入り浸っている。親族とは絶縁状態で、どこに住んでいるのかも知らない。自分ちのお墓がどこにあるのかも行ったことがない。宿題、部屋のごみの中に埋もれているだろうと思う。そういう子どももおります。

私が20年前に出会った子どもの話をします。その子は、夏休みに入った途端に、先生、何で夏休みあるんと真顔で僕に言いました。今、思えばネグレクト家庭で、夏休みはどこにも行かず、友達は何も行っていないけど、自分は1学期でやめちゃったから誰とも遊べない、そういう生徒でした。そのころから、格差とも言える生活スタイルや家

庭の価値観の多様化の中で、子どもたちの生活や学びの変化が起きています。

さて、2学期が始まりました。家庭から学校へと子どもたちの生活の中心が大きく変わります。いろんな思いで新学期を迎えた子どもたちが、充実した2学期の学校生活を過ごせたらいいなと思っています。

しかし、2学期、特に9月は、いろんな意味で問題行動やいじめ、不登校といった課題があらわれやすい時期です。まずは、そのような課題の実態と学校の対応、市教委の施策の一部を御紹介したいと思います。

実態をわかっていただくために、この後、事例を幾つかお話しします。ただ、この事例は実際のものではなくて、私がつくったフィクションです。ただし、市内の実例の中から要素を抜き出してつなぎ合わせたものですので、かなりリアルな内容になっていると思います。

まず、事例の1つ目です。不登校になった事例。不登校になった子は小学生の男の子です。上に中学生のお姉ちゃんがあります。そして就学前の弟がいます。兄弟は3人兄弟。家庭は母親と子ども3人、そして同居男性の5人で暮らしておられます。お母さんは仕事を幾つか持っておられて、朝早くから夜中まで仕事をかけ持ちしています。休日もその男性とパチンコに出かけて家にいないことが多いです。就学前の幼児のみ同居男性の実子で、男性が家庭で面倒を見ています。家はいわゆるごみ屋敷で不衛生な状態です。食事は主にスーパーのお弁当。

中学生のお姉ちゃんは欠席は少ないですが、昼前くらいに起きて登校します。小学生の弟は自分で起きて登校ができないので、欠席がちです。学校からお母さんへの連絡がつきにくいために、弟が朝登校していない場合は、小学校から教員や不登校児童生徒支援員が家庭訪問します。そして、寝ていたり、起きていてもパジャマのままの弟を起こして、着がえさせて、連れてくるようにしていた、そういう事例です。

教員や不登校児童生徒支援員が朝、連絡をとったり、家庭訪問に行ったりするという例は、これはほとんどの学校で実は今行われています。私の知る限り91の小学校があって、そのうちの4分の1の教頭先生は、朝の日課として、朝、学校中の鍵をあけて回って、次にお花の水やりをします。その次に、必ずこういう気になる子の家庭への連絡をしている教頭先生は、約4分の1ぐらいいらっしゃるんじゃないかなと思います。

課題としては、学校へ送り出す力が弱い家庭が見えてくると思います。お母さんが仕

事を朝早くから夜中までせざるを得ない状況、いわゆるダブルワークという状況で、シングルのワークでは家庭を支え切れないということで、昼間までの5掛ける5、25時間のパート。一旦、家に帰って、スーパーで買い物して、これ食べとかれよと言うて家に置いて、また夜、パートの仕事に出かけていくと。そういう実態の家庭は、実は多くありふれているような気がしています。

具体的な支援としては、毎朝の連絡、家庭訪問をしている学校が多いです。不登校児童生徒支援員は全校には配置できていないんですが、何校か配置している学校の朝の様子をこの間、聞かせていただいたんですが、朝はホワイトボードを用意していて、家庭への連絡が必要な子どもが、まずずらっと書いてあります。そこに担任が朝来ているかどうかを職員室に帰って丸印、バツ印をします。それを見て、不登校児童生徒支援員や教頭先生、教務主任が電話をかける。何時何分に電話、つながらない、何時何分に電話、つながった、これから行くというのをホワイトボードに書き込みます。今度はいよいよ行けない子、あるいは連絡が通じない子には誰が迎えに行くのか、今日は迎えに行かないのか、そういう判断をして、支援に当たっている実態があります。

こういう家庭には福祉部局との連携は欠かせません。福祉事務所の中にある地域子ども相談センター、そこに配置している子ども相談主事ですとか、そういう方々との連携、場合によっては、子ども総合相談所、市の児童相談所との連携は欠かせない連携だと思います。さらには地域との連携。主任児童委員さんなんか、たくさんこういう家庭にはかかわってくださっています。地域の行事、夏休みなんか、こういうお祭りがうちにあるからおいでねという声かけをしてもらったりする。そういう声かけが功を奏する場合もあります。

もう一つだけ事例を言います。暴力行為の事例です。中学校の女の子です。両親とこの女の子、そして保育園の弟の4人世帯。父親は数年前から単身赴任に行っています。母親は夜勤のある仕事で、家にいる時間が定まっていません。中1のころは、特に問題行動はなくて登校もしていました。しかし、家では家事をしたり、弟の世話をしたりすることが忙しくて、次第に勉強についていけなくなりました。

中学校2年生になって、4月から短いスカートで化粧して登校するようになりました。教室には入らずに、当該校舎の裏、学校の隣にある公民館等で友達と過ごすようになりました。中学校2年生の9月、まさにこの時期です。学校は文化祭に向けて午前中授業となり、午後は各クラスで文化祭の準備に取りかかっていました。本児は劇

に出ることになって、クラスの生徒とセリフを覚えたり、衣装をつくったりしていました。しかし、友達に誘われるとふらっといなくなって、校舎の裏などでスマホをいじったりして過ごしていました。

ある日の午後、近くの公民館から、数名の女子生徒が喫煙しているという連絡があって学校から数名の教員が向かったところ、この子が喫煙をしていました。教師が喫煙をとめるように言ったんですが、本児はたばこを吸い続けたために、女性の教員が文化祭の準備に戻りなさいと注意して、本児の口からたばこを取り上げようとした。すると、その女の子は、何しよんならと言って、女性教員の手を振り払いました。そのときに、たばこの火が女性教員の手当たってやけどを負ったと、そういう事例をつくってみました。

課題は幾つかありますが、学習のおくれから非行傾向、あるいは不登校傾向になる子がいます。岡山弁で言うと、勉強がようわからん、授業がおもしろうねえということがきっかけになって、教室から離れてしまう子どもは多いような気がします。

あわせて、高校に行けるのかなという進路に対する不安です。自分らの経済状況も中学校2年生で全部わかってる子は少ないです。果たして私立の高校に行かせてもらえるのかどうか、そういったことも含めて不安に思っている子がいます。そういう不安から非行に走ってしまうケース。

そして、スマホ、喫煙、服装等の学校での指導のあり方。これも子どもの心、ケース・バイ・ケース違うので、この子にはこういう指導、この子にはこういう指導、それをどこまでそろえてやっていく必要があるのかという指導のあり方の課題もあります。

対応や支援としては、とにかくこういう子どもたちをしっかりと学級の中に取り入れてやっていこう、その格好の1つの材料が学校行事です。文化祭を中心に、学校行事に引き入れてやっていこうということ。そして、先ほど来から話題になっています学習支援、進路保障、そういったことが必要です。そして、非行防止教室ですとか、昨年度から導入しています学校警察連絡室といって、警察の方が今学校に入ってもらっているので、喫煙している子どもへの指導のあり方なんかについて、警察と協力をしています。そういったことが効果的な対応、支援としては効果がある事例です。

時間がないので、最後に特別支援教育の実態についてお話をします。先ほど来から発達障害であります、それも含めた全障害のある子どもたちも年々増加をしてきて

います。今、特別支援学級に入級している子どもたちは小学校で1,600名、中学校で500名です。パーセントで、26年なんです、小学校が3.8%、中学校が2.7%、これは全国のパーセントよりかなり高いです。小学校は全国が1.9、岡山3.8、中学校は全国1.7、岡山2.7%です。

一方で、通常の学級にもほぼ同数の障害のある子どもがあります。全て合わせると、何らかの特性や障害を持って支援を必要としている子は約1割いると思われま

す。そういう子どもたちを支援するに当たって、学校は大変苦勞をしているんですが、一日の日課を紹介します。ある特別支援学級、小学校の日課です。

朝、保護者から定時連絡が入ってきます。今日は迎えが必要かどうか。迎えというのは、先生が途中まで迎えに来るのが必要かどうか。薬を飲んだかどうか。今日一日に予定の変更がないかどうかといったことを朝、保護者と連絡をします。そういうことを入れておかないと、来るか来んかもわからんし、来てもパニックになる可能性のある子もいます。そういう確認をまず保護者ときちっとします。

朝、子どもたちを迎えます。その間、特別支援教育支援員という教員ではない立場の人間にも入ってもらっているんで、今日は支援員さん、この子についてねという確認をしておきます。そして朝、子どもを迎えます。荷物の整理をします。校門から教室までなかなか行けない子がいます。そういう子どもの支援をします。

やっと朝、授業が始まります。そのクラスは1年生から4年生まで4人の子どもがいます。ということは、教員1人に対して子ども4人ですので、一斉授業ができません。する場合も当然ありますが、基本的には、その子その子に応じた勉強をしないといけないので、いわゆる我々の業界用語で、わたりの授業と言うんですが、最初は1年生の子どもについてまず指示を与えます。何々ちゃん、何々しておこうね。次、2年生の子どもと一緒に行き同様にします。次、今日は3年生、この時間は3年生の子の国語がメインだとしたら、国語の目当てをつかませるのに10分時間をかけます。そして5年生に指示をします。というように渡っていくわけです。そして1年生のところに帰って、今度は1年生の子ども算数の目当てをつかませる。といったような授業をつくらなければいけません。

ある子は、この時間は交流学級といって、通常の学級に行ってお勉強する子もいます。その子にも指示をしないと行けません。そういうのが一日の授業です。

4時間目、おなかすいた、暑い、そういう一時的な欲求だけで反応してしまうお

子さんがいます。うろうろしたり、勉強が手につかなくなったり、そういう子どもに誰がつくのか、どういう指導をするのか、どういう支援をするのかということを経験しながらやっています。

給食を何とか食べさせました。中には、その後、薬を飲ませることを保護者と約束している子どもがいます。もう昼に帰ると言う子がいます。そしたら保護者に連絡をして、迎えに来てもらうかどうかの判断をします。そういったことが日々行われます。

これからは中学校の文化祭、小学校の音楽発表会、11月ごろに向けて、全体練習なんかも入ってきます。そういうところに入りにくい子も。ある子の例を言うと、今日は何々ちゃん、リコーダーの練習をします。僕、入らんと言います。何でかという、その子は、自分はそのリコーダーが吹けると思っています。自分の練習は終わっています。だけでも練習に入りなさい。そういう子どもに、全体みんなのできるようになるまでが練習なんだということを理解させる必要があります。そういったことを粘り強くやっていくと。

一日が終わります。下校の連絡をします。明日の準備をします。明日の授業の準備、4学年あったとしたら、6時間、4掛ける6こまの授業の準備をしなければいけません。そういう特別支援学級の実態があります。

今年度は3本柱を方針として立てています。特別支援教育についての方針です。1点目が授業を通した特別支援教育の推進。2点目が適切な就学相談、教育支援を行う。3点目が校内体制の整備。この3点を柱に特別支援教育を進めています。

非常に簡単ではありますが、事例を御紹介させていただきました。

以上です。

○大森市長 御意見、御質問、お願いいたします。

○奥津教育委員 いじめのことについてお聞きしたいと思うんです。いじめ等を中心とした問題行動が多いと言われて、それはかなり把握ができてるところは反面あるのではないかと思ってるんですが。例えばつい最近、岩手の事例等にもありましたように、要するに多少サインはあるんだけど、ちゃんと把握できずに、ちゃんとした対応ができてない。それで自殺等の事件になったというケースがあったりします。

その辺の事案の吸い上げというか、見つけるというか、その辺のあたりで気をつけてらっしゃるといふか、しっかり注意してることがあればお聞きしたいです。

○服部 いろいろありますが、例えばアンケート調査を定期的実施したりとか、一番

効果があるのは、起こりやすいのは休み時間とか放課後とかですので、その時間に手のあいている、手のあいているというか、わざわざあけて、教員が廊下とか教室とか運動場とか、そういったところにしっかりいると。ただ監視してるんじゃないで、子どもに寄り添っている。その場で起きるちょっとしたトラブル、そういったこと見逃さずに、その場にずっと教員が入って、支援したりお話を聞いたりする。そういったことが大きいじめに発展させないことで非常に有効だと思っています。

○**奥津教育委員** それをある程度徹底さす、教員の中で認識させるために、どのようなことをされてるか。

○**服部** 25年9月にいじめ防止対策推進法、大津の事件を受けて法律が施行されたわけです。それを受けて、各学校でいじめ防止に対する基本方針を立てていただいています。それに基づいて校内委員会を開く。校内委員会は学校で起きたいじめ問題を吸い上げるだけではなくて、いじめを生まないための防止のためには何が必要か、どういうことを重点的にやっていこうかということをお話合ってもらっています。そこにも、スクールカウンセラーを初めとする専門家の方にも入っていただくという取り組みをしています。

○**大森市長** ほかに。

○**山脇教育長** 今日、それぞれ小学校、中学校、服部さんからお話を聞いて、やはり子どもの置かれている状況が、数年前と違いますか、私自身も現場におりましたので、若いころの状況と当然今大きく変わりつつあると深く感じるんですね。

その中で特に顕在化してきているのが、特別支援であり、また子どもたちの格差と言えいいのか、経済格差と言えいいのか。子どもたちが学校にやってきている背景がさまざまある。その背景を受けて、学校の中で教育を行っていかなければならない。その背景をそっちのけで、それを無視してするわけにはいかない。

そのためには、背景であるものをしっかり捉えることと同時に、それにどう対応していくかが必要になってくる。それを全ての教員に、一律にお願いすることはなかなか難しいであろうということになれば、当然、福祉との連携もしていかなければならない。ただ連携だけにとどめなくて、家庭を改善するところまでいかない限り、多分、その根底的なものは解決されないんじゃないかなと思うんですね。

もう一つ思ったのは、先ほどの平坂校長さんからありました。落ちついた学級集団づくりが、Q U、アセスもあるんだけど、その前に子どもたちがわかりたいという授

業をしてるかどうかが一番基本にないといけない。その上で、QU、アセスによって人間関係をしっかり見ていきながら、さらにそれによって改善を図っていくことも必要なんじゃないかなと思っています。

授業改善に向けて、先ほど小学校長会も取り組みにかかっていると。中学校も今取り組んでいってることもお聞きしてますので、しっかり子どもたちに沿った授業、授業づくりをしていけば、先ほどの学力も問題行動も含めて、今の現状は少しでもよくなればと思っているところがあります。授業をしっかり根本に据えるということが、やはり基本として我々としても考えておかないとならないのかなと思っています。

○大森市長 はい、どうぞ。

○曾田教育委員 校長会の小・中が来てくださって、そのお話をお聞きすると、この学力向上、今回、少し明るい兆しが見えたのは、しっかり校長会の中で手だてを考えられて、教育委員会の施策とマッチできたのかな。それとともに、4年前の学力状況の調査で、小学校6年生であんまり振るわなかった子どもたちが今中3で受けて、まあまあ現状維持か、ちょっと上でキープできたのは、小・中連携がうまく機能しつつあるのかなという感じがして聞かせてもらいました。

それと、三者の方々が言われてて、さっき小野会長さんが森田洋司先生の渦のと言われて、市長さんも渦のこと聞かれたんですが。渦つながりで思ったのは、小さい渦か大きい渦かわからないけど、岡山市内の子どもたちの実態の中に渦があるとしたら、それを上回る渦ができれば、きっと底もすくい上げることができるのかなという感じを抱きました。

それには、こういう総合教育会議、今までのような教育委員会だけでできないことができる、いいところがあると思うので、さっきからの福祉とか家庭とか地域とか学校とか、学校も小・中入れて、就学前もあるかもしれないですが、もうちょっとダイナミックにできることを提案していただけたら、もちろん我々も考えないといけないところですが、いいかなと感じました。

学校に向かう力が弱い家庭があるのは全国実態としてあると思うし、いろんなところでいろんなフレームがつくられてるし、岡山市も地域協働のフレームもあるし、小・中一貫のフレームもあるし、そんな中でもっと機能できることが。

例えば、私が個人的に思ったのは、部活動も、この後、多分、ベネッセさんのデータの中に、負担感の中で、部活動の負担感はあるまいというデータが。今お聞き

したら、部活動は先生たちのストレス解消、息抜きじゃないですよ、気分転換とか自分のやりがい感とかもあって負担感が少ないのか。でも実質かけてる時間は多いと。

そこがそのままいくと、多分、授業研究であるとか、さっき平坂先生が言われた教材研究であるとか、子どもたちの発言が偏るところの解消のための研究に時間がかけれないかな。としたら、部活動に期待感がある保護者たちを、少し意識改革するようなことは市教委もしないといけないことかな。そういうところも含めて、今すぐ家庭に手が入らないことでも、全体で、地域でやるとできることもあるのかなという感じがしました。

○東條教育委員会委員長 時間も迫ってますので、今、触れられてない点だけ。3人の先生方から伺っていた話で共通してるところで、どっちにしても授業の質を上げていくことのいろんな工夫をされていることがわかりましたし、かかわりの工夫をされていることもよくわかりました。ただ、もう一つは、それをしている先生方のエネルギーというんでしょうか、そこら辺をどういうふうに確保していくかということも課題かな。元気がないと、なかなかいろいろなことできませんので。

そういうことを考えたときに、今、教員の年齢構成が、割とベテランの層と若手の層に2層化してるところがあって、若手の先生方が割と近い年齢の人にバックアップしてもらいにくいような構造になってるかなと思います。ベテランの先生はよく御存じだけど、若手の先生はまだぴんときてないことがあって、どうしても若手の先生に対する評価が厳しくなっていく。悪い言い方すると、使えんやつが来たぐらいのこと思われかねなくて。そこまで思っていないけど、以前のような手厚い支援が、もしかしたら若い先生に足りてないんじゃないかと思うことがあります。構造上、しょうがないようなことになってますが、若い先生に元気よく仕事していただくために、やっぱりそういう工夫も必要かなと。

初任研いろいろな形でされてますが、やはり意識として、学校は全体的に忙しいです。とにかく即戦力で何ぼという評価になっていて、学校の中で若手の先生を育てていく感じが今弱いんじゃないかなという印象を、幾つかの学校をお邪魔して思ったことがありますので、ここら辺についても少し考えながら工夫していただければと。

これ感想ですので、本当、先生方のいろいろお考えもあるだろうと思いますが、時間も足りませんので、こんなこと考えましたという感想だけで終わりにしたいと思います。

○塩田教育委員 皆様のお話を聞いて、現場でそれぞれがすごく頑張られておられるんだなということを改めて感じて、本当に頭が下がる思いがしております。

そんな中で、小学校で調べられた先生方の残業時間で、8時までに帰られる方たち50%ですか。そう思うと、私とすると、先生方の家庭のことが心配になったりもするわけです。本当に負担を少なくして、教員の先生方のワークライフバランスも考えていかないといけないのだなと感じました。

1点、若い先生方と3年以上の先生方の悩みであったんですが、そんな中で時間をつくり出すために会議であるとか、そういったことを少なくしていく。企画会議も省く方向になっているのを、少し危惧をしております。若い先生方、やっぱり1人じゃなくて、企画会議みたいなざっくばらんに話ができるようなところで情報共有をぜひしていただきたい。会議じゃなくてもいいですが、そういう機会が少なくなるのは少し残念かなと思いました。

それから、大きな岡山の渦という話が出てきたんですが、先ほど小野先生が言われたように、会津の、ならぬものはならぬというのはすごく大切なことだと思います。規範意識だと思うんですけども、やっぱり親の考えがさまざまで、物すごくそれをしっかりやっているお母さんたちがいるんですが、そういう人たちが少し変わったという目で見られることもあったりします。規範意識は大人の中で育っていくものなので、大人とかかわる、親以外の大人とかかわる時間を確保できるようになるのは大切なことなのかなと感じています。

○大森市長 私も塩田さんと同じで、規範意識は非常に重要じゃないかなと思います。これは社会に出れば当然必要なものですから、小学校のうちからきちっとやっていかないといかんと思います。

1つだけ質問ですが、前回、環太平洋大学の橋本理事長にお話を伺ったんですけど、橋本さんのポイントの1つが、教員を本気にさせろという表現だったと思います。逆に言うと、大学の理事長とはいえ、教育者。教育者の目から見ると、岡山の小・中学校の先生は、現在本気になってないと映っていると私は感じました。それに対しての例えば反論とか、逆に今本気になれない事情があるんだとか、こうなったら本気になれるんだと。今も本気度はすごいと。いろいろ言い方があるでしょうが、小野さんと平坂さんに一言ずつ、それに対しての感じを伝えていただければと思います。

○小野 岡山の教員ですが、底力は十分にあると私は思っています。ただし、人間全てそ

うだと思いますが、自分でやっている、頑張っていることが評価の対象になって、それが評価されることがまずモチベーションの基本かなと。そういう面では、今の学力のいろいろ一連の問題については、こういう言い方していいのか悪いのかわかりませんが、やや逆効果みたいな形になっておるのかなと。校長も含めてですが。

ただし、それではいけないということを校長会でも再確認をし、どうするのかということですが。せっかく岡山市の場合、先進的なよい学校運営、あるいは地域の教育のシステムができつつあるので、そこに参画を、若い教員を中心にさせていく。そして自分たちが企画したり、考えたことはどんどん実現させていくモチベーションのアップが要るのかなと。

私も社会科の教員ですので、子どもにも、教員にも言うんですが、やはり薩摩藩や長州藩が、なぜあんなパワーが持てたか。それは身分の上下にかかわらず、有能な者とかやる気のある者を取り立てた、そこが源じゃないかなという話もします。これは校長会の課題としても、若い先生方の力を伸ばせれるような学校運営システムについて、研究も協議していきたいと思っております。

○平坂 まず、本気のところでですけど、先生方一人一人が学校の中で、自分の能力を生かせる場があるか。我々が若い先生を活躍させてやれるような場が提供できるかどうかというあたりが、随分大きいと思います。若いから力がないということはないです。ですから、うまいことその辺が、活躍できる場が、ばしっとその先生に合って、その先生が考えたことが成果を挙げて、それが例えばベテランの先生を刺激するという場面も学校の中では結構あります。ですから、全職員がそうなればいいんですが、我々は、特に若い先生がどんどんふえているので、若い先生をどうやって伸ばして力をつけてやれるかということが、校長としては非常に大きな課題です。

私の学校では、これまで新採用の先生が2人ずつ毎年来ておりましたので、今ごろ新採用の先生の中にも、少し精神的にもろい方もおられます。2年目の教員を新採用の先生がいる学年に張りつけたということで、去年、自分が経験した研修の大変さとかいうあたりをそばで見てわかっているので、具体的なアドバイスもできるだろうと、そういう取り組み方をして、1年目の先生が1年間頑張れるような工夫をしているところです。

○大森市長 服部さんも、本当にわかりやすい実態、想定をしながらもつくっていただきまして、本当にありがとうございました。今日、3人とも本当にありがとうございました。

した。

続きまして、ベネッセの西島さんに御説明お願いいたしたいと思います。

○西島（ベネッセ） ベネッセコーポレーションの西島でございます。

前回のお話の流れの中で、今日のお話ともかかわって、文部科学省から学校現場における業務改善のためのガイドラインが7月に公表されておりますので、その内容のレポートをするようにと仰せつかってしまっていて、資料の準備をしまっていております。

と言いながら、旬な話題ですので、全国調査のお話を少しだけさせていただきたいんですが、今、先生方、委員の皆様のお話の中に、規範意識という言葉がありました。中学校の生徒の学習時間と相関が高い学校質問紙の項目は何か見ていきますと、中学生の学習時間が長いことと相関があるのは、学校の質問紙の中で、生徒たちは礼儀正しいと思いますかというのが、実は相関が一番高かったんです。非常におもしろい結果といいますか、子どもたちの人間を育てていくところが大事だなとわかって、ああ、なるほどと感じました。別途、御報告はさせていただきますが、旬な話題として1つだけ御提供いたしました。

時間もございませんので、資料の前半はデータがざっと載ってございまして、後半に事例が載っております。データは、今日、現場のお話たくさんございました。かなり整合している話ですので、ざっと見ていただくようにしたいと思います。

3 ページに、言葉の御説明だけをさせていただきます。従事率、負担感率という2つの言葉が表の中に入っております。従事率は、多くの先生がその仕事にかかわっていらっしゃる。例えば授業の準備は、20人先生がいらっしゃったら20人全員がかかわりますので、100%という形になります。一方で学校経営の方針策定の仕事を、一般の教諭の方は全員はかかわりませんので、ここで言うと2割ぐらいの先生がかかわります。というのが従事率になります。その仕事をやるに当たって、この仕事はつらいなと思う負担感率が、それぞれ張りついているとなっております。ここで取り上げておりますのは、ここで言いますとAとB。従事率が高い仕事について取り上げさせていただきます。

次のページから幾つかグラフがありますが、内容には触れません。校長先生、教頭先生、もしくは教諭の先生の、まずは負担感が低い業務。従事率が高いのが前提ですが、負担感が低いです。もちろん学校経営ですとか子どもたちの成長に直接かかわるものが低いものになっております。

6、7ページは、逆に負担感が高い業務です。グラフが40%スタートになってますので短く見えますが、40%以上で並べていって、このような状況で、これまでも会場から話が出ていたようなところが負担感が高いところでございます。

次のページ、学校給食費の徴収で、別の調査が昨年文科省で行われておりましたので、その調査のデータを持ってきております。口座の引き落としはかなり進んでおりますが、ひとところほど給食費の未納が大きく騒がれることもなくなってまいりました。ある程度、落ちついてきてるのかなと。

次のページでは、給食費を児童手当から徴収をする仕組みをとっていらっしゃる場所もあります。

もう一枚、給食費ですが、もちろん担任の先生もかかわっていらっしゃいますが、校長先生、教頭先生もかなりかかわっていらっしゃいますということとともに、下のほうに事務職員で幾つかの方々並んでますが、少しずつ学校から切り離していく流れも出てきております。学校といいますか、先生から切り離していく。

次のページ、部活動のお話で、先生方、極端に負担感が高いわけではございません。

次のページは別の調査になります。日本体育協会で調査されたものですが、13ページの右、枠で囲っているところをごらんいただきたいと思います。やはりつらいのは、体育の先生ではなくて、経験のない部活動を指導しなければならない。でも、自分には専門性がない方がつらいところだと思いますので、先ほどのお話にもありましたが、その辺は専門的指導力を持たれてる外部の方の力をかりていくところが全国的にも進みつつあります。

次の14、15ページは、それに当たっての国からの発信を掲載しております。

16ページ、先生方の在校時間で、中学校の先生が、やっぱり部活もありますので少し長い形になります。

それから持ち帰りの仕事です。持ち帰りのところでは、最近ではデータを持ち帰ってというのもあって、USBメモリーをなくすというのもよく出てきたりします。そのあたりもネットワークの整備を含めて、適度なネットワークを教育委員会が市としてどう整備していくかも考えていかないといけないところだと思います。

次のページはまとめになります。今までのグラフを、大きく3つに分けておりますが、一般の先生方のところ、それから副校長先生、教頭先生のところ、両方にかかわるところで分けております。左からいきますと、学校全体での連携・協働。あるいは事務

職員と教員、先生との切り分けをどうしていくのかという組織、体制を考えていかなければならない。真ん中は、できるだけ効率化をしていきたいと思いますというのと、外部の力をかりていきたいと思いますというところです。右側も効率化、システム化になります。

この後は2ページにわたって、国からこんな方向性で改善を考えなさいと書かれているところです。またごらんをいただければと思います。

次の21ページからが事例になります。これも駆け足でいきますが、1つ目は、まさに前回、大橋理事長からありました学生さんとのかかわりです。個別には学校と学生がつながっているいろんなことやってるところありますが、静岡大学と藤枝市がしっかりとした契約のもとで、教育委員会がきちんとコントロールをしながらやっている例になります。特に美術、音楽、技術のような一人一人の支援が必要なものですとか、実験等で理科、このあたりのところを中心に、あと数学、英語においても学生ボランティアが行って、一定の要件を満たすと、ちゃんと教職体験入門という単位の申請が可能になるという仕組みをつくっていらっしゃいます。

それがほかの市にだんだん広がりつつあり、学生がなぜか足りなくなっているということですが、この前のお話ですと、いろんな大学と提携しながら岡山市、一緒にやっていけるんじゃないかというお話もありましたので、こういった動きができていけるかなと思います。

次のページ、栃木県宇都宮市の事務の例です。ここでは複数の学校に勤めていらっしゃる事務職の方を統合してマネジメントしていきましょうということで、効率化ですとか、あるいはスキルアップですとか、そういったことを図っていくということになっております。まだ、これは学区単位でやってますけど、恐らくこの後は、市全体でどう統合していくのかにステップアップをしていくと思います。

次のページ、ICTにかかわるところです。校務支援ソフトがあります。小・中学校の大体8割ぐらいは導入されているかと思いますが、岡山市さんも多分入っているんじゃないかと思います。

最初、導入のころは大変ですが、小牧市が2004年から、10年前から校務支援システムを使って、決して事務に使っているだけでなく、対外的な発信を含めて、保護者との連携等も含めてやってらっしゃって、夏休みの8月26日に何と本日337件、昨日1,185件、小牧中学校のサイトに訪れた人がいると。保護者の方が大半だと言われてま

すが、学校と保護者との連携をホームページを使ってやっている例であります。これには、情報共有も含め、その背後にある情報の管理、校務支援を含めて、ICTをうまく活用して、さまざまな課題解決ができています学校の例になります。

物すごく駆け足になってしまいましたが、こんな感じで先生方の負担感の軽減という流れに国もかなり動いてきておりますので、その動きも踏まえ、うまく利用しながら、なおかつそこにはない新しい解決策が考えられたらなと思っております。

以上でございます。

○大森市長 予定の2時半ですが、少しまだ時間いただきたいと思っております。御質問ございましたらお願いをいたします。

校務支援ソフトの導入と言ってるんですけど、これは具体的なイメージ、もう少し詳しく教えていただけます。

○西島（ベネッセ） 23ページをごらんいただければと思いますが、左の取り組みの概要という枠の中に2つ目のぼちが入っております。校務支援ソフトにより、教職員間の情報共有や児童生徒の出欠状況の管理、日誌の電子化を行うという形で書かれています。1つはデータ管理、情報管理です。子どもたちの成績がそこに入っていて、それが集計されて通知表のもとデータになったり、あるいは指導要領という法的に管理しなければならない職務分掌になったりして、出力までできると。通知表はそこで映し出されるというものです。それは情報の管理のほう。

もう一つは教職員間の情報共有になりますが、グループウェアという言い方をします。先ほど職員会議では、連絡事項は極力短くというお話もありましたが、連絡事項は職員会議でやりません。全部ネット上でやりますということで、その校務支援ソフトに連絡事項を全部アップして行って、検討の必要なことだけを会議でやるということをやったり、コミュニケーションツールも含めて校務支援ソフトという言い方をしています。多分、岡山市様でも入ってらっしゃいますよね。

○大森市長 25ページで、校務支援システム整備状況は。

○西島（ベネッセ） 県ごとの調査の最新版でございます。

○山脇教育長 岡山市は昨年から入れ始めていて、3年計画ですが、一応、全校には入って、1段階目、2段階目、3段階目、来年度に全部完成する予定になってます。今、言われた職員間の連絡等々については、一昨年からできるようになった。それから、ことしは成績処理ができるようになって、来年度は保健管理について、それも入れる

ようになってきていると。3年計画で全校に入れていくということなんです。

○大森市長　そういう面では、職員の負担感が少し減ってくると。

○山脇教育長　成績なんかの処理がね。

○西島（ベネッセ）　導入時は、新しいシステムですのでちょっと。あとはかなり。

○塩田教育委員　24ページ、ホームページのアクセス数、かなり多いですが、どういう情報を発信されてるんですか。

○西島（ベネッセ）　学校内で行われていることですか、あるいは校長先生が特別な方だからかもしれませんが、いろんなコラム的なことを、教育に関するコラム的なことを発信されて、保護者の方向けに発信されたりとか、本当に小まめにいろんな情報を発信されてます。私も夏休みの細かい情報までは見てませんが、夏休みこれだけ発信されるということは、恐らく9月に向けて、こういうことをやらないといけないということを、子どもや保護者がこれを見ながら理解をして新学期に向かうという文化といますか、習慣として位置づいてるんだらうなと思います。

○曾田教育委員　2点、教えてください。1つは宇都宮市の事例で、共同実施の内容で、事務職員さんの共同実施、いろんな自治体でされてると思いますが、これはもちろん事務職員さんの負担軽減もつながってるだらうし、学校職の職員さんということなんでしょうね。実際の数値的なデータは出てくるんですか。

○西島（ベネッセ）　済みません。数字は特にはなかったですね、出てないですね。

○曾田教育委員　学籍に関する事務とかいろんなことが出てるんですが、効果が出ているということですよ。

○西島（ベネッセ）　3年ほどになりますので、ある程度、感覚としては多分出ていると思いますが、数字ではまだ総括を出されてないようなので、ちょっと確認はしておきます。

○曾田教育委員　もう一点だけ、藤枝市の取り組みで、学校支援ボランティアとの関係で、契約を結ぶと言われたんですが、契約は学生と結ぶ、学校と結ぶ、どんな内容なんでしょう。

○西島（ベネッセ）　教育委員会と静岡大学。こういうやりとりをして、こういう授業支援をしていきたいと思いますというのが。

○曾田教育委員　申し合わせのようなこと。しっかりした契約書でサインをするとか、そういう類いのことではない。

○西島（ベネッセ） 契約書まであるかどうか確認はしてませんが。

○大森市長 ありがとうございます。

とりあえず、今日のところ時間が少なくて申しわけありませんでした。我々のほうも、教育委員会からのアンケートが一番負担感が多いようですから、よくそのあたりを理解していただいてやると。これだけは間違いなく、今日からでもできる話でございますので。とりあえず本日の協議はこれまでといたします。

最後に事務局、何かございましたらお願いいたします。

○司会 ありがとうございます。

次回の会議でございますが、10月中に開催をしたいと考えておりまして、日程が決定次第、改めて皆様に通知をさせていただきます。

以上で、平成27年度第4回岡山市総合教育会議を閉会いたします。長時間にわたりお疲れさまでございました。